

造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割：コミュニケーション・ツールとしてのアートのか（特集 戦後70年：過去から未来へのメッセージ）

著者	田中 勝
雑誌名	Global communication studies = グローバル・コミュニケーション研究
号	3
ページ	57-81
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001363/

造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割 ——コミュニケーション・ツールとしての アート——

田 中 勝

The Power of Art as a Communication Tool: The Significance of the Origami Crane as a Symbol for Peace

TANAKA Masaru

Japan's origami "Paper Crane" (origami crane) is a work of creative but unusual art work that has become a symbol of peace that has been accepted by people all over the world, crossing borders and cultures. This article examines the role of the "origami crane" as a form of non-verbal communication and analyzes its role in the peace movement. First, the meaning and the history of paper crane are presented, followed by its evolution into a symbol of peace through the story of Sadako Sasaki. Mihaly Csikszentmihalyi's concept of "flow" helps to explain why the origami crane as a symbol of peace came to be diffused throughout the world and accepted by people everywhere. Yoko Ono's work, "Crane" is presented as a case study.

As a result of this history, the origami crane has become a symbolic message of peace, and everyone who folds the origami crane can be a messenger of peace.

キーワード： 千羽鶴、佐々木禎子、フロー、平和のメッセンジャー

はじめに

戦後 70 年の歴史の中で、平和の象徴として造形作品の「折り鶴」が、平和創造、平和創出のツールとして、公の式典や平和教育、そしてアートの表現の場において数々展開されてきた。表現された、または制作されてき

た「折り鶴」は、平和という共通のメッセージをもって発信され、広島、長崎を含む日本のみならず、国境や文化の違いを乗り越えて世界各地の人々にひろく受け入れられてきた稀有な創作品である。しかし、その「折り鶴」が、歴史研究としては考察されつつも、なぜ「折り鶴」が平和の象徴として世界にひろがり得たのか、その造形作品が持ち合わせた意味について、深く考察されることはなかった。平和の象徴としての造形作品のなかで、「折り鶴」ほど世界にひろまっているものは他にない。本論の目的は、「折り鶴」が、非言語のコミュニケーション・ツールとして、どのような役割を果たしてきたかを検証し、造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割を考察していくことにある。

1. 「折り鶴」の歴史

「折り鶴」の歴史の始まりは「折り紙」の歴史上にあり、紙の歴史でもある。中国四大発明の一つである紙の起源から始まる「折り紙」の文化は、「紙を折る」という行為から発展し、造形としての「折り鶴」に至る。

平和の象徴の造形作品として「折り鶴」が成立するには大きく2つの要素が必要である。一つは「鶴」そのものへの意味づけである。もう一つは「紙を折る」という文化が存在することである。紙は、写経や記録、もの書きとしての用途から、贈答儀礼として、紙を折って使用する折形(折据)をはじめとする供物や贈り物を包むものとして使用されていったが、江戸時代に入って紙の生産量が増え、紙の普及とともに「折り紙」は、一般庶民にも親しまれるようになっていった。

「折り鶴」が日本の文献上にあらわれるのは、1682年に出版された俳諧師、井原西鶴の『好色一代男』である。主人公の世之介が7歳の話として、「をり居をあそばし、『比翼の鳥のかたちはこれぞ』」(井原、1982、p. 18)との記述がある。しかし、この文献には「比翼の鳥」がどのようなものなのか、具体的に図や絵は掲載されていない。「折り鶴」が図像として確認できる文献資料としては、1700年に出版された雛形本『當流七寶 常盤ひいなかた』の中の121番「落葉に折鶴」の着物に、「折鶴」という言葉と図が初めて同時に現れる。また、「折り鶴」の図像が描かれている出版物とし

て、1717年発刊の『けいせい折居鶴』がある。

その後、更に「折り鶴」を発展させた連鶴が誕生する。明確な形で連鶴が記載されている文献は、1797年に京都で出版された『秘伝千羽鶴折形』である。世界最古の遊戯折紙の本である。『秘伝千羽鶴折形』は、伊勢国桑名の長円寺11世住職、義道一円（号は魯縞庵）が連鶴の折り方を絵入りで49種類（挿絵を含めれば51種）ほど考案したものを、秋里籬島が企画し、吉野屋為八が版元として出版している。『秘伝千羽鶴折形』の序文には、中国の聖賢の代の詩を引用して、「鶴が巨万の宝を得る」（岡村、1991、p. 8）ことを述べ、続いて「鶴を折るごとに寿命が延びる」（岡村、1991、p. 8）と書いてある。ここで述べられている『秘伝千羽鶴折形』の「千羽鶴」とは、現在、一般的に言われる「千羽鶴」のことではなく、つなぎ折り鶴のことを「千羽鶴」と言っている。長円寺がある三重県桑名市では、「桑名に伝承されている千羽鶴」として、「一枚の紙から数羽の連続した鶴を折る独特の連鶴」として言い伝えられ、この折り方は桑名市の無形文化財に指定されている。

「折り鶴」は、折り紙の中でも最もポピュラーな作品のひとつであり、先に述べてきたように『秘伝千羽鶴折形』における考案者は文献上、魯縞庵と定かであるが、「折り鶴」そのものは誰が考案者かは定かではない。その「折り鶴」は、なぜ長い間色褪せることなく、愛され親しまれてきたのか、鶴そのものに込められた意味について確認しておきたい。

1. 1. 鶴の意味について

鶴が登場する中国の最も古い文献としては、中国最古の詩篇である『詩経』の小雅「鶴鳴」に詠われている。鶴の意味には諸説あるが、いずれも繁栄をもたらす象徴として描かれている。また、中国、前漢代の思想書『淮南子』には、「鶴壽千歳、以極其游、蜉蝣朝生而暮死。而盡其樂。」（楠山、1988、p. 1003）とあり、長寿の象徴として用いられている。また、神仙思想に影響を受けた石庭での鶴と亀をモチーフとした鳥は、鶴に長寿と繁栄の吉慶としての意味を表現している。日本においては、鶴は瑞鳥といい、鶴の別名として仙界の霊鳥で尊い鳥として仙禽という言葉が使われ、

また、先に上げた中国の古典の意味から一般的に「鶴は千年、亀は万年」とのことわざとしてひろく知られている。これらの意味を持ち合わせてきた鶴のイメージは、「折り鶴」においても受け継がれ、造形芸術として存在してきた。その後、「折り鶴」が、佐々木禎子という一人の少女との出会いによって平和の象徴となり、更なる意味を持ち合わせていくこととなる。

1.2. 佐々木禎子と「折り鶴」

1943年1月7日、広島で誕生した佐々木禎子は、1945年8月6日、2歳で爆心地1.6キロにあった広島市楠木町の家で被爆する。「茶の間にいた二歳の禎子は、爆風によって三メートル以上も吹き飛ばされたが、奇跡的にかすり傷一つ負っていないかった」(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 26)。倒壊した家から逃げている途中、黒い雨を浴びる。以下、禎子の母、佐々木フジ子の証言である。

10時ごろじゃなかったですかね。パラパラっとですよ、川の中に。「あら、雨が落ちだしたな」って。そして、(岸に)上がってみたら、白地のようなのをきていたのが、黒い点々がこうあるんですよ。着ている着物に。(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 27)

禎子は直接被爆をし、放射性物質を含んだ黒い雨を浴びたことで、どのような健康被害を引き起こすかは、当時知る由もない。その後の1947年に、原爆の人体への影響を長期的に調べる目的で広島市と長崎市に原爆傷害調査委員会(ABCC)が設けられた。ここでの検診はあくまで調査研究であり、治療ではない。禎子も被爆者として、合計6回の検診記録とともに「被爆したときの状況、家族の病歴、かかっていた医師の紹介状、死亡時の解剖記録、地元の中国新聞が掲載した死亡記事の英訳など」(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 43-44)の記録が収められている。その記録によると1954年6月24日のABCCでの検診で次のような所見が記されている。「She is in good condition / Appetite good / Sleep well /

T. Ito」(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 44)

1954 年、小学 6 年で 11 歳となった禎子は、普通の健康な少女でしかなかった。しかし、その後 11 月の後半、軽い風邪を引き、下顎、首、左耳の後ろなどに複数のしこりができる。翌年 1955 年 2 月 16 日に ABCC で重急性リンパ性白血病と診断が下され、翌日、担当医から余命 3 ヶ月から長くても 1 年と言いつ渡され同年 10 月 25 日に亡くなる。その亡くなる 2 ヶ月前の 8 月、被爆から 10 年となる 1955 年 8 月 6 日の慰霊の日を前に、名古屋の「愛知淑徳高青少年赤十字団員が「原爆患者に差し上げて下さい」との手紙とともに、赤、黄、紫などのセロハンによる折りづる 4 千羽を日赤広島県支部に贈った。うち 2 千羽が広島赤十字病院に配られた」(中国新聞、1995、4 月 23 日)とある。禎子が入院していた広島赤十字病院で、祈りの贈り物としての千羽鶴と出合うこととなる。禎子は同じ病室に入院していた大倉記代と、これをきっかけに「折り鶴」を折り始める。見舞いに訪れた同級生の道原千鶴の次のような証言がある。

千羽鶴をすごく折ってられましたね。ときどき、折る紙がなくなるんです。そのころキャンディー、飴玉をくるむ紙で、きれいな紙がありましたから、私がキャンディーを買って、きれいに紙の皺を伸ばして、何十枚かたまると持って行ってあげるんですよ。それであるとき、「私も鶴を折ってきてあげるわ」と言ったら、禎子さんは「これは私が自分で折らないと。自分で折り上げないと病気が治らないんだよ」と言っていました。(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 63-64)

この禎子の言葉に明快な意思が示されている。千羽鶴の数について諸説があるが、同じ病室で一緒に「折り鶴」を折った大倉は、1 ヶ月経たないうちに、それぞれ千羽に達したと証言している。千羽を超えてもなお、鶴を折り続けた禎子について、父の佐々木繁夫は次のような証言がある。「『あまり根を詰めるとだめよ』って何回言っても、『いいから、いいから、考えがあるんだから』としかいわななですよ」(NHK 広島放送局「核・

平和」プロジェクト、2000、p. 69)。また、繁夫は「この小さな鶴に『生きたい、元気になりたい』という禎子の思いが込められている」(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 69)とも語っている。

禎子の死後、同級生だった6年竹組の子どもたちは、卒業後も禎子を見舞い続けることを目的に、「団結の会」を結成する。それは、禎子の死去から2週間後の1955年11月8日のことであった。この席で、担任であった野村剛から、入市被爆者で、火力発電所で働いていた河本一郎が紹介された。その河本から次のような提案があった。「禎子だけでなく、原爆の犠牲になったすべての子どもの霊を慰めるために、『原爆の子の像』を作ったらどうだろうか」(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 78)と。その呼びかけは、4日後に広島で開催された「第6回全日本中学校長大会」の開場前でビラ2000枚の訴えとなって展開されていく。それから3年後の1958年5月5日、「原爆の子の像」が平和記念公園で除幕されることとなる。像の制作は、彫刻家の菊池一雄が制作した。高さ9mの建造物の塔の内部には、1955年にラッセル＝アインシュタイン宣言に署名し、核兵器廃絶を訴えたノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹の筆による「千羽鶴」と「地に空に平和」の文字が彫られた銅鐸を模した鐘が取り付けられている。「原爆の子の像」を提案者である河本が「禎子さんや多くの広島・長崎の原爆の子たちのことを忘れないでほしい」(NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 79)との思いから、禎子は「原爆の子」の代名詞となっていったのである。

1.3. 禎子が折った「折り鶴」

生前、禎子が折った「折り鶴」の数について、644羽までで力尽きたとの証言と、千羽を超えていたとの証言で分かれていたが、実兄の佐々木雅弘が2013年に出版した『戦争ノンフィクション 禎子の千羽鶴』(学研パブリッシング)で明らかにしている。

禎子は懸命に折っていた折り鶴に祈りを込めていました。最初の1000羽は自分の病気が治るようにと切に願ったでしょう。1000羽折っても

造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割

禎子の病状はよくなるどころか、日を迫うにつれて悪くなっていきました。次の1000羽には父の借金のことをお祈りしてくれました。家族が禎子の幸せを祈ったのと同じように、自分が病に倒れてもなお、禎子は家族の幸せを祈ってくれていたのです。(佐々木、2013、p. 153)

このような家族の経済状況もあり、禎子が亡くなった直後に正確な情報は公表されなかったことが言える。ここまで、佐々木禎子の被爆と「折り鶴」との出会いを追ってきたが、禎子についてNHKスペシャルでは、『『サダコストーリー』は、20世紀後半の人類が共有する神話である』(NHK広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 3)と位置づけられ、次のように語られている。

「生きたい」と願って鶴を折り続けるサダコの姿は、終わりのない原爆の恐怖と今なお闘い続ける被爆者たちの象徴であると同時に、市民への無差別大量殺戮が繰り返された20世紀、その苦しみと向き合ってきたすべての人々の姿と重なり合う。(NHK広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p. 3)

「折り鶴」を折る禎子の行為は、何も知らずに浴びさせられた放射能による苦しみへの克服と、人間が「生きたい」という生存の権利の意味が含まれている。それは、単に長寿や繁栄としての象徴に留まらず、生存の権利への主張というメッセージでもある。よって、非戦闘員をも含む市民への無差別大量虐殺時代の幕開けとなった20世紀以降、禎子の「折り鶴」は、ヒロシマの原爆被害者だけでなく、世界のいずこであろうとも、人間として生きる生存の権利の主張の意味を持ち合わせることとなったのである。続いて、この禎子の物語が、どのように世界に伝わり、広まっていったのかを述べておきたい。

「サダコストーリー」を紹介する紙芝居や漫画などを含めた絵本・読み物の数として、広島市のホームページでは、日本23冊、海外35カ国で14冊となっている。海外に「サダコストーリー」がひろく伝わった始まりが、

禎子の死後1年後、取材のために広島を訪れたドイツ出身のユダヤ人ジャーナリストのロベルト・ユンクが出版したルポルタージュの『灰墟の光——甦えるヒロシマ——』（文藝春秋新社）であった。ユンクは来日の際に河本一郎と出会い、禎子の物語を世界に伝えることへとになっていく。その後、「サダコストーリー」を更に世界へと伝えたのが、オーストリアの児童文学作家であるカール・ブルックナー（Karl Bruckner）が、1961年に出版した『Sadako will leben（サダコは生きる）』である。国際アンデルセン賞を受賞し、25の国と地域であわせて200万部が出版される。また、この本がオーストリアで出版された翌年の1962年2月、広島「原爆の子の像」のもとに海外から初めて折り鶴が届けられるということもあった。もう一冊、特に英語圏を中心に「サダコストーリー」を世界へと伝えたのが、カナダ人女流作家のエレノア・コア（Eleanor Coerr）が、1977年にアメリカで出版した『Sadako and the Thousand Paper Cranes（サダコと千羽鶴）』（Bantam Doubleday Dell Books for Young Readers）であった。これらの出版物を通して禎子の被爆体験と「折り鶴」の物語は、ノンフィクションからフィクションとして想像がひろげられ、「サダコストーリー」として海外にも伝わり、ひろがっていった。

1.4. 表現された「サダコストーリー」の影響とひろがり

表現された「サダコストーリー」の世界は、国内外へと伝わってきた。折り紙文化が定着している日本では、平和の象徴としての「折り鶴」そのものは広く認知されているが、広島市が1999年と2000年の2年間に広島市あてに「折り鶴」を送ってきた個人や学校・団体の代表者へアンケート調査（19カ国630名）を行い、次のような結果が出ている。「あなたは『サダコと千羽鶴』の物語を知っていますか？」との質問に対して、日本は「知っている61%」「知らない39%」、海外は「知っている93%」「知らない7%」であった。この結果から広島市では「折り鶴とサダコは、日本よりも海外で密接に結びついてひろまっている」（広島市ホームページ）と分析をしている。

また、「サダコストーリー」は、海外でさまざまなひろがりと展開をあら

わしている。例えば、1968年にスペイン・バルセロナ市に私立学校としてサダコの名を冠したサダコ学園が創設され、1990年にアメリカ・シアトル市では、「サダコ平和公園」と「サダコ像」が設置されている。また、1996年8月6日にアメリカ・サンタバーバラ市では、毎年8月6日を「サダコ平和の日」と宣言され、記念行事が行われ、モンゴルでは、毎年8月6日に、ラジオやテレビで『ヒロシマの折鶴』（作詞：インヘー、作曲：ダッシュニウム）という歌が流されている。その他、1996年から2000年を目指して行われた「2000年平和のための100万羽折り鶴プロジェクト」をはじめ、「折り鶴」を折り、平和への思いを表現していくプロジェクトは、造形表現に限らず「サダコストーリー」の演劇や音楽、アニメーション、映画にと様々な媒体で表現されてきた。長崎市では、被爆50年の1995年に、公募にて採用した『千羽鶴』（一般公募作詞：横山鼎、依頼作曲：大島ミチル）を、長崎原爆資料館で毎日11時02分に流し、長崎市の防災無線では、毎月9日の11時02分に流している。また、長崎市役所の電話の保留音としても採用されている。映画表現では、木村莊十二監督、諸井條次脚本の『千羽鶴』が、「全国各地の学校などで巡回上映され、ヒロシマの少女と折り鶴の物語を日本中に知らしめるのに大きな役割を担うことになる」（NHK広島放送局「核・平和」プロジェクト、2000、p.98）。

これら「サダコストーリー」の結果の延長の一人に、1945年の広島、そして長崎への米国による原子爆弾投下時の大統領のハリー・S・トルーマンの孫、クリフトン・トルーマン・ダニエルがいる。小学生だった長男が1990年に図書館で借りてきたエレノア・コア著書の『サダコと千羽鶴』との出会い、そして、禎子の兄、雅弘とその息子祐二にニューヨークで出会うこととなる。更にその出会いが、クリフトン・トルーマンの広島、長崎訪問となり、広島平和記念式典参列へと繋がっていく。

現在、広島市平和記念公園の「原爆の子の像」に捧げられる「折り鶴」の量は、1年間で約1万束（約1000万羽）、重さは約10トンと言われている。また、広島市は「原爆の子の像」に捧げられた「折り鶴」のうち、データベース登録用紙の記入者を「折り鶴データベース」として市のホームページにて公表しており、国内外の数や団体名とメッセージなどが見れる

ようになっている。「折り鶴」が日本において世代をこえて親しまれているのは、折り紙文化が土台にあるからである。日本における折り紙文化の普及の要因は、フリードリッヒ・フレーベル(Friedrich Wilhelm August Frobel)の幼児教育法が幼稚園教育のなかに導入され、その中に折り紙が取り入れられてきたことが大きく影響している。「サダコストーリー」と共に語られ、折られてきた「折り鶴」は、造形表現として、何故そのようなひろがりを持ち合わせたのだろうか。また、「折り鶴」自体は、造形芸術という定義の中に収まるものであるのだろうか。

2. 造形芸術としての「折り鶴」と心理学からみる「折り鶴」制作

先ず「折り鶴」は造形芸術であるかについて論じてみたい。イギリスの詩人で美術評論家でもあるハーバート・リード(Herbert Read)は、造形芸術の定義について、「形」と「色彩」から読み解き、そして、そこに、「主観的な側面」として「感情移入」の概念を用いた。また、造形芸術は、絵画に使われるキャンバスや紙、絵の具、彫刻の石や鉄や木、映像機器による光の色彩など、さまざまな素材を通して人間が思考した内面世界、主観世界の投影によってカタチづくられ、創造と鑑賞の両面において、作者自身と作品を鑑賞する他者との間で存在する。他者との間とは、芸術が持ち合わせている伝達性のことで、「芸術の真の機能は感情を表現し、理解を伝えることである」(リード、1966、p. 187)と、リードは述べている。フランスの美術史家ルネ・ユイグ(Rene Huyghe)は、「作品というのは建築から絵画までいずれも眼に見える部分を持っており、この部分が、幾何学的な定義にしたがえば、空間のなかに刻み込まれる」(ユイグ、1988、p. 26)と述べている。ユイグは、芸術作品(造形芸術)における「かたち」が生み出す根本的な働きである「力」について言及し、客観的領域と主観的領域を横断的に考察している。その「かたち」は、静的な空間のなかに刻み込まれ、ダイナミックな「時間」のなかで運動と変化の「力」として存在している。またそれは、目に見えるものばかりでなく、目に見えない人間の精神世界の働きかける「力」の作用も含んでいる。絵画や彫刻など視覚的に「かたち」を鑑賞できるもの、また、作品と鑑賞者の関係性のな

かで生じる伝達性の「力」の存在はもとより、前衛芸術家のジョン・ケージ (John Cage) の『4分 33秒』の作品のように、沈黙のなかにおける「力」の作用、または、コンセプチュアル・アーティストのマルセル・デュシャン (Marcel Duchamp) の作品『泉』における「かたち」と言葉の意味が織り成す存在の「力」の働きをも包括している。

では、「折り鶴」は造形芸術として成立しうるのか。先に述べた「芸術の真の機能は感情を表現し、理解を伝えることである」(リード、1966、p. 187) ならば、「折り鶴」が造形芸術として成立しうることが言える。なぜならば、「折り鶴」の存在は、単にかたち作られた造形のみあるのではなく、「感情を表現し、理解を伝えること」に主眼が置かれているからである。「サダコストーリー」以前の「折り鶴」と、平和の象徴としての「折り鶴」はいずれも、単なる遊戯としての折り紙遊びに留まる創作物ではなく、「感情を表現し、理解を伝えること」に主眼が置かれた造形作品である。

本来、芸術における造形作品の制作者には一定のスキルを要求される。「折り鶴」においてはどうか。感情心理学において「折り鶴」を折って完成までの時間と心理状態(フロー状態)を調査した研究がある。その研究からは、「折り鶴」を折って完成までの時間が、2分27秒04との結果で、その93.3%の人がフロー状態になることが示されている(石村、河合、國枝、山田、小玉、2010、p. 204)。『『フロー』とは、意識がバランスよく秩序づけられた時の心の状態を記述するために人々が用いる言葉』(チクセントミハイ、1996、p. 8)で心理学者のミハイ・チクセントミハイ (Mihaly Csikszentmihalyi) が提唱する概念である。具体的には、フロー状態の構成要素として次の8項目が挙げられている。

- ・明確な目的意識を持っていること
- ・集中し、深く探求していること
- ・体の活動と精神が融合し、無意識に動くこと
- ・時間感覚が失われること
- ・何かあったら自動的に調整すること

- ・スキルと難易度のバランスが合っていること
 - ・状況や活動を自分でコントロールしていること
 - ・本質的な価値を理解しており、活動が苦にならないこと
- (チクセントミハイ、2015)

「折り鶴」制作において、これらの要素を確認してみる。「明確な目的意識を持っていること」は、「サダコストーリー」における平和の象徴として展開されている「折り鶴」制作が生命尊厳の平和創造、平和創出の願いや折りのカタチとして表現されている。「集中し、深く探求していること」は、「折り鶴」制作は、個人の想像力によってのみ生み出されるものではなく、一つの決まった折り方を習得(学んで)して完成していく過程で、高度な集中力を必要とする。しかし、折り紙文化の無い地域の人であっても、また、子ども(小学生程度以上)であっても、習得可能なものであり、制作において、角の折り目の揃えなど、集中力と注意力が活かされる。「体の活動と精神が融合し、無意識に動くこと」とは、つまり自意識の喪失であり、それは「自己の喪失でもなく、もちろん意識の喪失でもない。それはより正確には自己という意識の喪失にしかすぎない」(チクセントミハイ、1996、p. 82)ということである。「折り鶴」制作においては、自己を表現しているという感覚より誰もが平和のメッセンジャーとして、平和の役割を果たしている感覚を獲得することを意味している。「時間感覚が失われること」とは、「時間が普通とは異なる速さで進むということ」(チクセントミハイ、1996、p. 84)であり、制作物を創造するアーティストのみが達成(完成)できるものではなく、ある一定の時間、しかも造形作品を制作するには極めて短い時間において、主体的で特別な制作時間を経験することが言える。「何かあったら自動的に調整すること」は、「折り鶴」は個人の手の届く範囲で制作が行われ、折り方や折り目など成功と失敗が明確で、首の折り方や羽のひろげ方などにおいては、必要に応じて調整ができる点である。「スキルと難易度のバランスが合っていること」は、「折り鶴」制作における難易度は、折り紙文化を親しんでいるかどうかにも左右されるが、制作において易しすぎず、難しすぎず、精神的な負荷が少ない制作要

素を含んでいる点がこれにあたる。「状況や活動を自分でコントロールしていること」は、「折り鶴」制作する各自の制作における美的感覚と時間ペースとを制御している。「本質的な価値を理解しており、活動が苦にならないこと」は、「サダコストーリー」における平和の象徴としての「折り鶴」、また、それ以前に意味づけられてきた長寿や繁栄としての象徴として価値を持ち合わせ、ポジティブな願いとして表現されている。

チクセントミハイが、最適経験またはフロー状態について、「行動能力（スキル）と行動のために利用できる機会（チャレンジ）とのすばらしいバランス」（チクセントミハイ、2010、p. 42）と述べているように、「折り鶴」制作における心理状態は、チャレンジとスキルの相関関係において、絶妙なバランスを持ち合わせていることが言える。禎子が「折り鶴」を折っていくなかで、小さな「折り鶴」の制作に挑戦し、自らスキルレベルを上げ、チャレンジしていく姿は、禎子自身のフロー状態のみならず、そのチャレンジを知るものにとっても、フロー状態の共感をひろげていると言える。また、その制作が、アーティストや特別なスキルを持ち合わせた制作者だけでなく、ひろく一般市民や子どもたちにもフロー状態が起こり、折り紙文化の無い地域においても、ひろく受け入れられ、ひろまっていったことが言える。

「折り鶴」の造形的特徴として、「折り鶴」は正方形の紙で折り、最後の段階で両羽を左右に引っ張ると折り畳まれた平面から立体に変形する。その特徴について「折り鶴」研究者の高木智は、「その形は固定されていて、ほどけたり、元に戻ったりしない」（高木、1991、p. 133）という。また、「明治のはじめ、パリの博覧会で折り紙を折っている日本人を見た外国人は『手品師だ』と思った」（高木、1991、p. 133）とあるが、この驚きは、「折り鶴」を初めて折る者、見る者にとっての感動に繋がっている。これら「折り鶴」制作が持ち合わせている特徴と意味は、多くのアーティストにとっても、興味深いモチーフとして存在してきた。造形芸術としての表現は、モニュメントとして、菊池一雄制作の『原爆の子の像』をはじめとして、平和都市宣言の記念碑などでも、「折り鶴」は象徴的なモチーフとして使用されている。可西泰三制作の『平和』（平和都市宣言碑：富山県高岡

市・市役所前)は、重なり連なった鶴で千羽鶴をイメージするものが表現されている。また、金工作家である若山裕昭を中心に総合企画として制作されたモニュメントは、千羽鶴をモチーフにされたもので、広島市立己斐小学校にある。この小学校は、爆心地から約 3km のところにあり、原爆投下後、校舎は救護所となり、校庭は亡くなった人々を茶毘に付した場所である。その校庭に設置された『慰霊と平和の祈り』のモニュメントは、「千羽鶴」「五大陸」「地球儀」「放射能標識」そして「被爆した広島」をテーマにデザインされ、999 羽の鶴で五大陸の地図を表現し、1000 羽目の大きな鶴と地球儀を組み合わせた構成で表現されている。広島への原爆投下から 65 年目の 2010 年に設置された。いくつかのモチーフが重ねられる中、「千羽鶴」が果たしている役割は、モニュメントのタイトルにある通り「慰霊と平和の祈り」そのものである。

現代美術家である宮島達男が推進する「時の蘇生・柿の木プロジェクト」は、長崎の被爆柿の木二世の苗木を植樹し、育て、アートイベントを開催していくプロジェクトである。日本、イタリアなど、このプロジェクトの植樹式の中でも、間接的に「折り鶴」は幾度か登場している。例えば、イタリアのサンドナートミラネーゼ市役所 (2000 年)、アメリカのヘイウッドバーンズ環境教育センター (2002 年)、カナダのマルグレイブスクール (2003 年)、ドイツのボーデン湖畔公園 (2006 年)、イタリアのレオナルド・ダ・ヴィンチ国立総合学院 (2011 年)、イタリアのガヴァルド総合学校 (2012 年)、イタリアのウゴリーニ小学校 (2013 年)、イギリスのグラスミア小学校 (2014 年) などである。これは、「時の蘇生・柿の木プロジェクト」自体が、「折り鶴」を表現しようと試みたのではなく、世界各地で開催されてきた植樹式のイベントの際、平和の象徴として開催地の人々によって用いられている。「折り鶴」が平和の象徴として世界共通語となっている証明でもある。「折り鶴」そのものをダイレクトに作品の中に取り入れたアーティスト作品がある。「折り鶴」をモチーフに表現する数々のアーティスト作品のなかに、美術家オノ・ヨーコの『鶴』の作品がある。この作品を手がかりに、造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割について更なる考察を進めてみたい。

3. オノ・ヨーコが表現した作品『鶴』

オノ・ヨーコの作品『鶴』は、2011年に広島市現代美術館の「第8回ヒロシマ賞受賞者記念 オノ・ヨーコ展 希望の路 YOKO ONO 2011」において発表された13作品のうちの1作品である。この『鶴』も含め12作品が、この展覧会のための新作として発表された。『鶴』の作品は、オリジナルの白い折り紙で折られたいくつもの「折り鶴」で構成され展示室のいろいろな場所に置かれた。展示室に入場して、はじめの部屋に『ねがい』との墨で描かれた書による作品と、『とびら』という白い木製ドアが並んでいる床に『鶴』の作品が少し置かれた。また、『再建——また建てればいいんだ、いいんだ』では、2011年3月11日の東日本大震災で倒壊した家の部材、家具などとともに「折り鶴」が置かれた。さらに、『とびら』と『ねがい』が次の展示室にも続き、広島を中心部にある商店街を行き交う人々の姿をライブカメラの映像によって壁に映し出した作品『本通り』と、床の上のところどころにアクリル樹脂を使って水たまりのようなイメージを作りあげた『想い』がある。その空間のなかにアーティスト自身の手によって散りばめられた無数の白い「折り鶴」が床に置かれた。その他、広島市現代美術館の収蔵作品である『HAKO』の周りや、『メッセージ』との作品の場所に透明な箱が置かれ、そのなかには、たくさんの「折り鶴」が入れられた。そして、『カバー』という整然と並んだ無数の毛布に覆われた死体のようなインスタレーション作品のなかでこの「折り鶴」がもっとも多く使用された。会場ロビーに設置されたテーブルの上には、「希望の路 YOKO ONO 2011」との文字が両面に印刷されたオリジナルの白い折り紙と共に、「鶴を折ってください。Fold a paper crane.」とのメッセージが置かれていた。

ヒロシマをテーマに表現した「折り鶴」ばかりでなく、3.11の東日本大震災に寄り添うテーマにおいても「折り鶴」を使用している。これは、「折り鶴」が「サダコストーリー」としてのストレートなメッセージというよりも、禎子が原爆症による病を乗り越えられるようにとの願いの部分の延長として、作品のタイトルにある通り『再建——また建てればいいんだ、いいんだ』との表現がされていることが読み取れる。

この『鶴』の作品を平和的観点から深く分析するために、「表現された根本的原因」、「表現されたメッセージ」、「表現された平和的足跡」の3点から捉えて考察してみたい。

「表現された根本的原因」とは、表現される全ての作品には、創作するに至る何らかの動機や原因がある。アメリカの心理学者アブラハム・H・マズロー (Abraham Harold Maslow) は心理的欲求を5段階に分けてあらわし、精神的欲求に属する最も高次の欲求を「自己実現 (自己表現、能力発揮、創造的活動) の欲求」とした。芸術における表現は、この段階に位置すると述べている。また、平和の追求もこの段階と重なる。マズローは、芸術の創造に至る理由について2つタイプがあることを述べている。1つは、比較的動機づけられていないものとして、伝達的であるというより表出的なもので、個人間のことというより個人内のことであることを述べている。もう1つが、「何かを伝えようとし、感動を喚起し、他者に対して何かを示し、成さんとする」(マズロー、1987、p. 359) と述べている。この2つとも「表現された根本的原因」となる。

次に「表現されたメッセージ」とは、表現された作品そのものと、作品のコンセプトやアーティスト自身が残した言葉などである。また、アーティスト自身が残した言葉だけでなく、作品が発表された場所や空間、シチュエーションなどからも汲み取ることもできる。

最後に「表現された平和的足跡」とは、作品を創作するアーティスト側だけではなく、鑑賞者や社会、時代が、作品をどのように受け止め、どのような影響を与えたかを検証することである。芸術は、作品が存在することによって、鑑賞者は鑑賞する行為を行い、そこに伝達構造が生まれる。さらに、伝達構造を持つがゆえに、作品と鑑賞者の間にコミュニケーションが生まれる。本来、芸術作品の鑑賞における体験はまったく個人的であるといえることができる。しかし、伝達性を持ち合わせているという観点から捉えるならば、芸術は社会性を持つといえることができる。芸術における社会との関係性については、芸術社会学をはじめ、芸術学においても、多く論じられてきており、アーティストは、表現した作品に対して社会的責任が発生する。その意味において、「表現された根本的原因」と「表現され

造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割

たメッセージ」が平和的「意」によるものであっても、表現された行為とそのプロセスにおいて、直接的暴力になる場合がある。以上の3点から作品『鶴』を分析してみる。

「表現された 根本的原因」

- ・1945年8月6日、アメリカによる広島への原爆投下。
- ・1974年、プラスチック・オノ・スーパーバンドのライブで、広島を訪問。
- ・佐々木禎子の「折り鶴」。
- ・1995年、アメリカによる広島への原爆投下から50年のときに、広島平和記念公園にある《原爆の子》の像のモデルにもなった少女〔佐々木禎子〕からインスピレーションを得て作った楽曲『Hiroshima Sky Is Always Blue（ヒロシマの空はいつも青い）』をポール・マッカートニー家族と共に録音（洲濱、神谷、2011、p. 16）。その他、楽曲『Kurushi』などもある。
- ・ヒロシマ賞の受賞。

「表現された メッセージ」

- ・「（折り）鶴は今や世界中の平和のシンボルだ」²⁾
- ・オリジナルな白い紙で折られた、たくさんの折り鶴で構成された作品。
- ・「一人一人が自分にできる小さなことをしていけば、世界は平和になる（西村、2011年7月30日）」
- ・月刊誌『美術手帖』のオノへのインタビュー記事で、「——折り鶴は会場全体にちっていますね。エントランス・ホールには、鶴を折れる紙が用意されています。折った鶴は観客が会場に置いていってもよいのでしょうか？ また、出口にも折り鶴の入ったボックスが置かれていますが、持ち帰ってもよいのですか？」との質問の応答が次の通り。

みなさんには鶴を折っていただきたいのね。折り鶴は平和のシンボル

ですから。会場に置いてくださってもいいし、持ち帰ってくださってもいい。ご自分の友だちに送るとか……いろいろな展開を想定しています。折り鶴に込めた「祈り」が世界中に広がればいい。それが実際の折り鶴でなくて、コンセプチャルな、頭の中で祈りを込めた折り鶴であってもいいと思います(オノ、2011、p. 26)。

「表現された 平和的足跡」

- ・鑑賞者がオリジナルの白い紙で鶴を折るインストラクションの形態の参加型の作品でもある³⁾。
- ・月刊誌「美術手帖」による広島でのオノへのインタビュー記事で、東日本大震災の被災者の家財を並べた作品にも折り鶴が添えられ、野外展示のために雨や風にさらされることについての応答が次の通り。

そのままでいいけど、だれかが新しい折り鶴に置き換えてくれるかもしれないでしょう？世界平和のために鶴をつくったからそれで終わりというのではなくて、踏まれたらまたつくる、風雨に曝されて壊れてしまったらまたつくる。そういうオルガニックな関係性を誘発したいのです(オノ、2011、p. 27)。

以上の3つのデータをもとにみると、アメリカによる広島への原爆投下によって被爆した少女、佐々木禎子への「直接的暴力」を因として、健康回復を祈念して折られた「折り鶴」の造形は、その後に平和のシンボルとして存在し、オノの作品のなかでも用いられた。また、この『鶴』の作品には、「構造的暴力」の存在はみうけられないのが特徴で、「文化的暴力」は、2歳という戦争に対して無抵抗の幼児が被爆するという無差別虐殺を含んでいる。また、参加型アートとして『鶴』の作品への共感と、「折り鶴」を折るという行為のオノのメッセージへの応答は、「積極的平和」として機能していることが言える。また、オノの言う平和のシンボルとしての「折り鶴」の存在が、「直接的暴力」と「文化的暴力」の2つの存在を際立たせていることをあらわしている。また、この作品のアプローチが、暴力

的なイメージをモチーフとしていないにも関わらず、「直接的暴力」を読み解いたことは、興味深い点である。では、なぜそのような読み解きを可能にさせたのか。それは、この『鶴』の作品が、「折り鶴」というオブジェの背景にある佐々木禎子の物語を認識させ、更にアーティスト自身が佐々木禎子に思いを寄せたコメントなどから、「直接的暴力」と「文化的暴力」を読み解いたからである。また、広島で発表されたこの『鶴』の作品は、鑑賞者が広島という場所において、「折り鶴」というオブジェの背景にある佐々木禎子の物語を認識している場合も多く、少なからずとも平和の象徴としてのイメージを持って鑑賞していることは、平和のメッセージとして、読み易くしてくれている。また、『鶴』の作品は、インスタクションの形態で参加型アートとして、常に「積極的平和」を促している。これは、「折り鶴に込めた「祈り」が世界中に広がればいい」（オノ、2011、p. 26）とのオノのコメントがあるが、「ひとりで見る夢はただの夢、みんなで見る夢は現実になる」⁴⁾とのオノ自身のアート・コンセプトに意味が繋がっている。オノの作品には、言葉そのものを表現し、作品としている『WAR IS OVER!』や『DREAM』などもあるが、『鶴』の作品もステートメントや歌詞、メッセージといった言葉と繋がり、鑑賞者が受け取る作品のメッセージを、できるだけわかり易く提示している。更に、Twitterやホームページなどのウェブサイトを活用し、オノ自ら、縁する人との対話も試み続けている。そこには、想像や創造といった思考が省かれたものでなく、「積極的平和」としての働きを持ち合わせていることも作品の大きな特徴のひとつであろう。また、『鶴』が発表されたこの展覧会で、広島市現代美術館では初めて「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス」⁵⁾が導入された。鑑賞者が自ら情報発信者になるということは、オノがこの『鶴』の作品でも展開している参加型アートの延長でもある。このようなことから、『鶴』の作品は、アーティストの作品に留まらず、鑑賞者と共に平和への積極的な役割を果たしていることが言える。

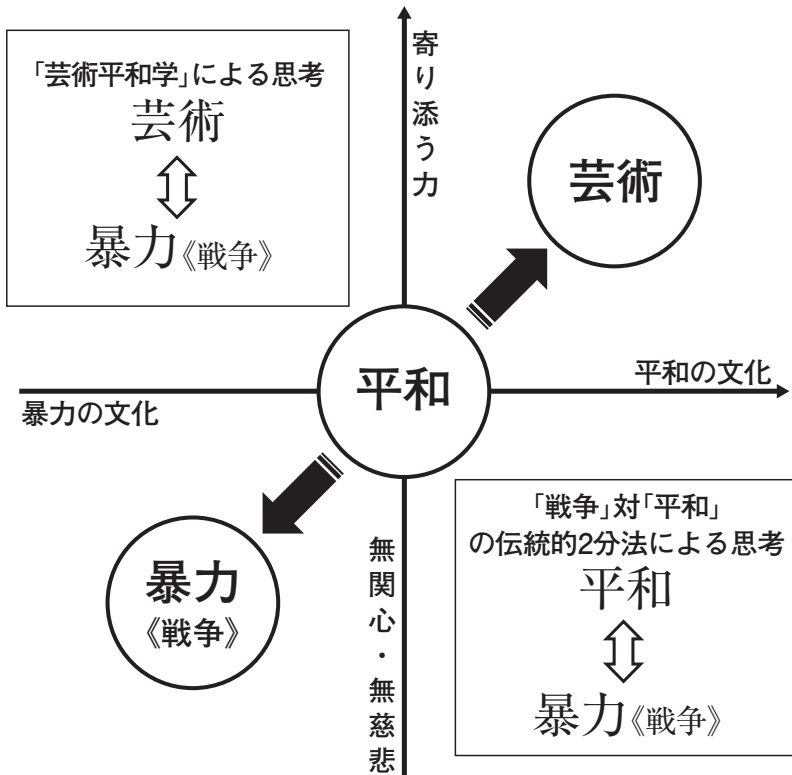
4. 芸術平和学的思考におけるコミュニケーション・ツールとしての「折り鶴」

オノのコメントに「一人一人が自分にできる小さなことをしていけば、世界は平和になる」(西村、2011年7月30日)とあるように、インストラクションの形態で参加型アートの『鶴』の作品が、一人一人の手で折られた「折り鶴」に象徴されるように、「折り鶴に込めた「祈り」が世界中に広がればいい」(オノ、2011、p. 26)との寄り添いがカタチとなっている。奥本京子は、「平和とは、対話・共感・非暴力・思いやり等の力を指す。対極にあるのが、軍隊における「非人間化」であるかもしれない。軍隊では想像力が最大の敵である。思いやりなどもってしまつては、戦争という人殺しは成り立たないのである」(奥本、2003、p. 177)と述べている。他者への思いやりこそ「寄り添う」ことであり、「平和」も「寄り添う」ことから始まることを提示しているからである。奥本は、平和的価値の創造において「創造力とは、想像力を伴ったものだ」と理解できるが、芸術はそれら2つの「ソウゾウ力」——想像力と創造力——を育み鍛える。平和の土壌を用意するためにはなくてはならない」(奥本、2004、p. 19)と述べている。その「平和の土壌」を耕す存在こそ、「造形芸術が果たす平和への役割」である。耕すとは、文化(Culture)の語源であるラテン語の意味とも重なり、平和の文化創造の本質もここにある。禎子の物語をはじめとする被爆体験が伝えようとする平和への祈りや願いを暴力(核兵器をはじめ大量破壊兵器等)との対義語でみるならば、その平和の大地をゼロと考え、暴力をマイナス要因と考えた場合、このマイナスをゼロまで持っていくには、明らかにプラスの存在が必要であり、その存在こそ、「寄り添う」ことから始まる「平和のアーティスト作品」としての役割を果たしている「折り鶴」であると言える。これらを図としてあらわしたのが図1の「芸術平和学的思考図」である。

戦後の平和の象徴としての「折り鶴」の存在は、佐々木禎子の被爆体験が造形作品の「折り鶴」と共に語られてきたことによって、物語としてひろがった。それは、「サダコストーリー」そのものが「寄り添う力」を高め、「折り鶴」の制作という「平和の文化」としての表現活動が掛け合わ

造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割

図 1: 「芸術平和学」的思考図



さった結果でもある。さらに「折り鶴」の制作が、フロー状態を満たすことによって、「寄り添う力」としての平和の価値を定着させ、平和的価値の共感を拡大させていると言える。また、そこで共有されてきた「折り鶴」の平和的価値が一時の流行りに終わらず、半世紀以上も持続し続けている。

芸術表現そのものが非言語のコミュニケーション・ツールとして文化や国境を越える力を持ち合わせているが、「折り鶴」制作は、コミュニケーション・ツールとしてどのような力を発揮してきたのだろうか。コミュニケーションについて「人が、物理的および社会文化的環境・コンテキスト

の影響を受けながら、他者と言語および非言語メッセージを授受・交換することによって、認知的および情意的な意味づけをする動的な活動過程である」(石井、久米、2013、p. 20) との概念を用いて「折り鶴」を読み解くならば、「折り鶴」が平和の象徴として生命尊厳の立場に核を置き、非言語としてのメッセージを持ち合わせた造形表現が、授受・交換を容易にさせ、平和というプロセスの概念の中で価値をあらわしていると言える。つまり、「折り鶴」制作は、非言語のコミュニケーション・ツールとして、共通の平和的価値における平和のメッセージが見えるものとして表現すると共に、(制作する)時間のなかで、平和の創造的活動体験を獲得してきたのである。

また、「折り鶴」制作は、特別なプロフェッショナルなアーティストのみならず、誰もが平和のメッセンジャーとして制作者に成ることができるコミュニケーション・ツールであり、奥本の表現を借りるならば、「折り鶴」制作者は、誰もが平和を発信する「市民芸術家」(奥本、2012、p. 178)なのである。

おわりに

折り紙文化が定着している日本のなかで親しまれてきた「折り鶴」。現在、「鶴」が持ち合わせる意味は、長寿や慶祝の象徴として古くからある意味と変わりはないが、「折り鶴」は、佐々木禎子という一人の少女との出会いによって、平和の象徴として、世界でひろく認知されるようになった。

「折り鶴」制作における心理状態は、チクセントミハイのフロー概念を用いて読み解くと、チャレンジとスキルの相関関係において、絶妙なバランスを持ち合わせている。つまり、誰もが「折り鶴」を制作することができ、平和のメッセンジャーとして、平和の役割を果たしているのである。

多くの場面で、禎子の思いを、病を乗り越え「生きたい」と描かれてきた禎子であったが、自分のために折った千羽鶴から、父の事業回復の為に折った2回目の「折り鶴」は、家族のため、他者のために生きた証であり、禎子自身が平和のメッセンジャーであったことを付け加えておきたい。

オノ・ヨーコの作品『鶴』は、インストラクションの形態で参加型アー

造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割

トとして、「折り鶴」の持ち合わせている要素が十分に活かされ、鑑賞者の外側にアート作品がある「消極的平和」ではなく、人々が平和のメッセンジャーとなる「積極的平和」として機能していた。

「折り鶴」は、半世紀以上もの間、世界各地で、語られ、折られてきたが、人々が平和を希求し続ける限り、非言語のコミュニケーション・ツールとして国境や文化の違いを越え、平和のメッセンジャーたちによって、今も折り（表現し）続けられている。

注

- 1) 一般的によく使用される折り紙のサイズは $15 \times 15\text{cm}$ であるが、『鶴』の作品では $24 \times 24\text{cm}$ のものが使用された。
- 2) ヒロシマ賞受賞の記者会見で、2010年12月8日付けの朝日新聞の「天声人語」を読んだときに、佐々木禎子の折り鶴のことが書いてあり、その記事からの印象で、折り鶴を作品として採用することを確認したことが述べられた。また、そのコラムでは、その日がジョン・レノンの命日であることに触れ、平和についての至言が紹介されている。
- 3) オノ・ヨーコの作品の多くは、観客への指示、つまりインストラクションの形態で観客の参加型の作品が多くある。例えば、『PAINTING TO HAMMER（釘を打つための絵）』や『IMAGINE PEACE Map Piece』、『Mend Piece』、『Bell of Peace（平和の鐘）』、『Wish Tree（ねがいの樹）』などの作品で、『Wish Tree（ねがいの樹）』は、鑑賞者など人々が、糸のついた紙片に願いごとを書き込んで木の枝に結ぶ作品で、1996年の初出品以来、世界中の美術館や文化センターで行われた多くの展覧会に含められ、ヒロシマ賞受賞者記念展でも出品された。それらの紙片は、2007年にオノ・ヨーコが建てたアイスランドの IMAGINE PEACE TOWER に収められている。
- 4) 1972年に発表されたシングル曲「Now or Never」の歌詞にある言葉で、2005年の核廃絶を訴える国連本部での演説でも語られてきた言葉である。
- 5) クリエイティブ・コモンズとは、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス（CCライセンス）を提供している国際的非営利組織とそのプロジェクトの総称で、インターネット時代のための新しい著作権ルールとして、様々な作品の作者が自ら「この条件を守れば私の作品を自由に使って良い」という意思表示をするためのツールであり、6種類のライセンスがある。特定非営利活動法人クリエイティブ・コモンズ・ジャパン「クリエイティブ・コモンズとは」<http://creativecommons.jp/licenses/>（参照 2015/10/31）

参考文献

- 石井敏、久米昭元(2013)「第1章 異文化コミュニケーションの基礎概念」石井敏、久米昭元、長谷川典子、桜木俊行、石黒武人著『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション——多文化共生と平和構築に向けて』(11-34頁)有斐閣
- 石川忠久(1998)『詩経 中 新釈漢文大系111』明治書院
- 石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博(2010)「おりづる課題の前後における心理状態の変化に関する研究」『感情心理学研究』Vol. 18 No. 3 感情心理学研究会
- 井原西鶴(松田修校注)(1982)『好色一代男』新潮社
- 今尾和雄編(1972)『雛形天の橋立：當流模様』はくおう社
- 奥本京子(2003)「平和的価値の創造における芸術の役割」ヨハン・ガルトゥング、藤田明史編『ガルトゥング平和学入門』(169-195頁)法律文化社
- 奥本京子(2004)「文学と平和の危険な関係——「古典」による教育と平和の価値は共存できるか」日本平和学会編『芸術と平和 平和研究第29号』(19-35頁)早稲田大学出版部
- 奥本京子(2012)『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性：ヨハン・ガルトゥングによる朗読劇 Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica からの考察』法律文化社
- 岡村昌夫(1991)「第一章 折り方等解説」日本折紙協会編『秘傳千羽鶴折形〈復刻と解説〉』(7-62頁)日本折紙協会
- 岡村昌夫(2002)『改訂版・つなぎ折鶴の世界——連鶴の古典「秘伝千羽鶴折形」』本の泉社
- 岡村昌夫監修、日本折紙協会編(2013)『鶴のおりがみ』日本折紙協会
- オノ・ヨーコ(藤原えりみ 聞き手=文)(2011)「インタビュー1 From Hiroshima」『美術手帖 2011年9月号』vol.63 NO.957(24-29頁)美術出版社
- 楠山春樹(1988)説林訓『淮南子 下』明治書院
- 桑名市ホームページ「桑名の千羽鶴——桑名の連鶴」<http://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,11161,234,642,html>(参照 2015/10/31)
- 洲濱元子、神谷幸江編(2011)『第8回ヒロシマ賞受賞者記念 オノ・ヨーコ展 希望の路 YOKO ONO 2011』広島市現代美術館
- 高木智(1991)「第四章 折り鶴 その歴史を語る」日本折紙協会編『秘傳千羽鶴折形〈復刻と解説〉』(125-135頁)日本折紙協会
- 中国新聞(1995年4月23日)「検証 ヒロシマ 1945～95 〈14〉 原爆の子の像」『中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター』http://www.hiroshimapeacemedia.jp/mediacenter/article.php?story=20120402164841253_ja(参照 2015/10/31)
- 西村文(2011年7月30日)「平和への一人一人行動を オノ・ヨーコさんヒロシマ賞 原爆資料館を見学」『中国新聞』
- 日本折紙協会 東京おりがみミュージアム「おりがみの歴史」<http://www.origami->

造形芸術の「折り鶴」が果たす平和への役割

- noa.jp/おりがみについて/おりがみの歴史 (参照 2015/10/31)
- ハーバート・リード (宮脇理、岩崎清、直江俊雄訳) (2001) 『芸術による教育』 フィルムアート社
- ハーバート・リード (滝口修造訳) (1966) 『芸術の意味』 みすず書房
- 広島市ホームページ「広がるサダコの物語」 http://www.pcf.city.hiroshima.jp/virtual/VirtualMuseum_j/exhibit/exh0107/exh01075.html (参照 2015/10/31)
- 広島市ホームページ「折り鶴に託された思いを昇華させるための方策について (最終とりまとめ)」折り鶴に託された思いを昇華させるための方策検討委員会 <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1392358521429/files/houkokoshou.pdf> (参照 2015/10/31)
- 藤田観龍 (1995) 『写真集 平和のモニュメント』 新日本出版
- ミハイ・チクセントミハイ (今村浩明訳) (1996) 『フロー体験 喜びの現象学』 世界思想社
- ミハイ・チクセントミハイ (大森弘監訳) (2010) 『フロー体験入門 —— 楽しみと創造の心理学』 世界思想社
- ミハイ・チクセントミハイ (2015 年 03 月 24 日) 『Biz/Zine 特別鼎談: チクセントミハイ博士×入山章栄氏×佐宗邦威氏 後編』 <http://bizzine.jp/article/detail/650> (参照 2015/10/31)
- ルネ・ユイグ (西野嘉章、寺田光徳訳) (1988) 『かたちと力』 潮出版
- 渡辺護著 (2004) 『芸術学 (改訂版)』 東京大学出版
- A.H. マズロー (小口忠彦訳) (1987) 『人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』 (改訂新版, 10 版) 産能大学出版部
- NHK 広島放送局「核・平和」プロジェクト (2000) (北出晃、村田英治、坂元信介、沢田博史編) 『NHK スペシャルセレクション サダコ「原爆の子の像」の物語』 NHK 出版